

# 「サセル」と「ラレル」の比較

## —機能の類似点と相違点についての覚え書き—

池田 英喜  
(Ikeda@isc.niigata-u.ac.jp)

【キーワード】 サセル、ラレル、事前関与、事後関与

### 0. はじめに

一般に助動詞「レル・ラレル(以降ラレルに統一して記述)」は、受身・可能・自発・尊敬という4つの意味を持ち、それが用いられる状況によって、この中のどの意味が選択されるかが決まる。一方、ラレルと形・音・構文(文法的)の特長非常に似ている「セル・サセル(以降サセルに統一して記述)」には使役の意味がある<sup>i</sup>とされる。本稿では、この良く似た二つの形式サセルとラレルの意味にはあえて言及せず、両者の持つ機能的特徴を比較し、類似点と相違点を整理するのがねらいである。

本稿で言う機能<sup>ii</sup>とは、サセルやラレルが動詞(句)に付加されることで、もとの動詞句によってあらわされる事態にどのような影響を与えるかということである。特にラレル形については、対応する能動文があるかどうかといったことは本稿では一切問題にしない。

### 1. 形式の類似の確認

いまさら言うまでもなく、サセルとラレルはそれ自体の形や音が似ているだけでなく、動詞への接続といった構文的特徴が同じである。(表1)

	一段動詞(食べる)	五段動詞(飲む)	カ変動詞(来る)	サ変動詞(する)
サセル	食べ・サセル <i>tabe-saseru</i>	飲ま・せる <i>nom-aseru</i>	来・させる <i>ko-saseru</i>	さ・せる <i>s-aseru</i>
ラレル	食べ・ラレル <i>tabe-rareru</i>	飲ま・れる <i>nom-areru</i>	来・られる <i>ko-rareru</i>	さ・れる <i>s-areru</i>

(表1)

<sup>i</sup> 実際には使役にも強制・許容といったいくつかの異なる意味解釈があるが、本稿ではそういったものは使役の下位分類であるとみなす。

<sup>ii</sup> サセル・ラレルが持つとされる使役・受身・可能・自発・尊敬といった意味はあくまで解釈の問題であり、どの意味をとるのが妥当かということに関しては、議論が分かれることもしばしばである。時には二つの意味を持ちえたり、どの意味にもうまく当てはまらないといったことさえある。

先生が来ラレルのなら、私も行かざるをえませんね。

可能? 尊敬?

一日も早い人質の開放が望まレル。

受身? 自発?

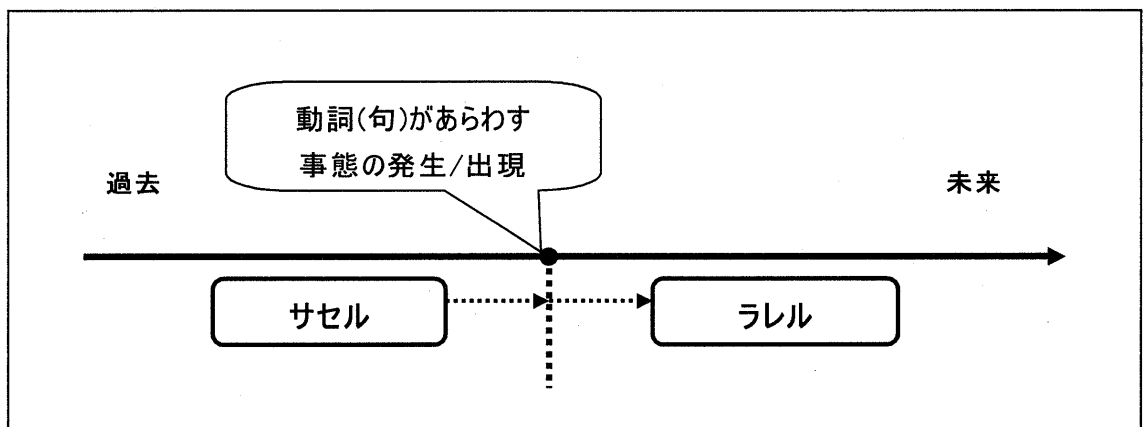
本稿では、このような意味の問題には立ち入らず、あくまでサセルとラレルの比較からそれぞれが持つ機能を考察する。

にもかかわらず、ラレルには異なる意味解釈が可能であるばかりに、古くからその意味の区別にスポットが当てられたり(松下(1930)、山田(1936)他)、対応する能動文との関係から、受身文の下位分類(寺村(1982)、森山(1988)、工藤(1990)、Shibatani(1990)、仁田(1991)他)を考えられることが多い。本稿ではサセル・ラレルをヴォイスの形式として取り立てることはせず、単に両者の類似点、相違点だけを観察することに主眼を置く。

## 2. 観察

寺村(1982)は、「使役と間接受身とは、ある事象を、その事象の当事者でない第三者が、間接的に関わることを表わす言い方である点において共通している」と述べる。これはしかし、使役と間接受身という意味の点で異なることを前提に述べているのであり、意味以外の点でどのような類似点/相違点があるのかについては深く追求していない。実はサセルとラレルは、動詞(句)によって表わされる事態の発生/出現以前に関わる表現か、以後に関わる表現かという点においてみごとに相補分布していることが、以外に見落とされている。

わかりやすく図で示すと以下のようなになる。



以下では、自動詞文・他動詞文の場合に分けて、確認する。

### 2.1. 自動詞文の場合

- (01) 雨が 降った。
- (02) 私が 雨を 降らせた。
- (03) 私が 雨に 降られた。
  
- (04) 父が 死んだ。
- (05) 父を 死なせた。
- (06) 父に 死なれた。
  
- (07) 私の患者が 死んだ。

- (08) 私が (私の)<sup>i</sup>患者を 死なせた。  
(09) 私が (私の)<sup>ii</sup>患者に 死なれた。

以上の3組の場合、(01)(04)(07)はいずれも特別な意味の付加なく、いわば中立的に事実を叙述しているに過ぎないのに対して、(02)(05)(08)では事態の外側に位置する第三者である引き起こし手、もしくは責任者として「私」が事態の発生/出現以前に関与していることを示しているし、(03)(06)(09)では、やはり事態の外側に位置する第三者である被害者、もしくは責任者として「私」が事態の発生/出現以後に関与していることが示されている。つまり、サセルの場合は事態に事前関与する第三者を付加し、ラレルの場合は事態に事後関与する第三者を付加する機能を持つといえる。ここでいう事前関与とは、実際に事態が発生/出現する以前に何らかの形で事態の発生/出現そのものに関わっていること。一方事後関与とは、事態が発生/出現したことによって、何らかの影響を受けていることを言う。別の言い方をすれば、事前関与も事後関与も、間接経験者として事態の発生/出現に関わっているということになる。

## 2.2. 他動詞文の場合

ここでは、他動詞文にサセル・ラレルを付加した場合について検証するが、ヴォイス一般の問題は本稿では考慮に入れていないので、もとの他動詞文には現れない第三者をガ格に据えて事態の間接的経験者として表わす場合に限って考察する。つまり、ラレルの場合はいわゆる間接受身のみを扱うということになる。

- (10) 太郎が 花子を 抱きしめた。  
(11) 私が 太郎に 花子を 抱きしめさせた。  
(12) 私が 太郎に 花子を 抱きしめられた。
- (13) 小泉首相が 田中外相を 更迭した。  
(14) 外務省が 小泉首相に 田中外相を 更迭させた。  
(15) 外務省が 小泉首相に 田中外相を 更迭された。
- (16) 泥棒が Aさんの金を 盗んだ。  
(17) 私が 泥棒に Aさんの金を 盗ませた。  
(18) 私が 泥棒に Aさんの金を 盗まれた。
- (19) 泥棒が 私の金を 盗んだ。  
(20) 私が 泥棒に (私の)<sup>iii</sup>金を 盗ませた。  
(21) 私が 泥棒に (私の)<sup>iv</sup>金を 盗まれた。

<sup>i</sup> 「私の」はガ格名詞句と一致するため、通常は表記されない。

<sup>ii</sup> 「私の」はガ格名詞句と一致するため、通常は表記されない。

<sup>iii</sup> 「私の」はガ格名詞句と一致するため、通常は表記されない。

<sup>iv</sup> 「私の」はガ格名詞句と一致するため、通常は表記されない。

(11)(14)(17)(20)では、ガ格名詞は事態の発生/出現を仕組んだ人間((14)では組織)を表わし、(12)(15)(18)(21)では、ガ格名詞は事態の発生/出現によって影響を受けた人間((15)では組織)を表わしている。特に(16)と(19)ではお金の所有者が異なっているので、受身を取り扱う場合にはガ格名詞との関わり合いの深さによって、意味解釈が異なることでよく議論されるところであるが、サセルもラレルもガ格名詞を事態の発生/出現の責任者として位置付けるという機能を果たしているといえる。ただサセルの場合には、事態の引き起こしてとしての責任者、いわば黒幕を、ラレルの場合は事態によって被害を被る責任者を表わしているという差があるに過ぎない。

### 3. 二つの形式にみられる機能の類似性

2節から、サセルは事態の発生に直接には関わらないが、事前にその発生に関与している第三者を付加し、ラレルはやはり直接には関わらないが、その発生後に関与している第三者を付加することを示した。つまり、サセルとラレルは間接的に事態に関与する第三者を付加する機能を持っているといえるのではないだろうか。そしてその違いは、事態が起こる前に関わる事前間接関与者(黒幕)を付加するか、事態が起こることで影響を受ける事後間接関与者(被害者)を付加するかにある。

### 4. まとめ

サセルとラレルという形式はおもしろいほどよく似ており、また事態の発生/出現に関しては事態に直接関わらない第三者が、サセルでは発生/出現以前を、ラレルでは発生/出現以後間接関与し、きれいに相補分布をなしている。時系列に沿った両者のこの分布の仕方は、サセルラレルという形式は存在しても、ラレサセルという形式が存在し得ないことも無関係ではないように思われるのだが、この点についてはまったく資料を持ち合わせていないので、なんとも言えない。

### 【参考文献】

- 天野 みどり (1991) 「経験的間接関与表現—構文間の意味的密接性の違い—」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 城田 俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房
- 国立国語研究所(1951) 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版
- 寺村 秀夫 (1976) 「「ナル」表現と「スル」表現」『日本語と日本語教育—文字・表現編—』国立国語研究所(『寺村秀夫論文集Ⅱ—言語学・日本語教育編—』くろしお出版(1992)所収)
- 寺村 秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 益岡 隆志 (1979) 「日本語の経験的間接関与と構文と英語の have 構文について」『林栄一教授還暦記念論文集 英語と日本語と』くろしお出版
- 松下 大三郎 (1930) 『標準日本口語法』
- 山田 孝雄 (1936) 『日本文法学概論』

鷲尾龍一・三原健一 (1997) 『日英語比較選書⑦ ヴォイスとアスペクト』 研究社出版

SHIBATANI, Masayoshi(1990) *The Languages of Japan*, Cambridge University Press